慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	<原身体>像へ：「身体の社会学」への一アプローチ
Sub Title	Toward the image of "the basic body" : one approach to "the sociology of the body"
Author	松尾, 信明(Matsuo, Nobuaki)
Publisher	慶應義塾大学大学院社会学研究科
Publication year	2004
Jtitle	慶応義塾大学大学院社会学研究科紀要 : 社会学心理学教育学 : 人間と社会の探究 (Studies in sociology, psychology and education : inquiries into humans and societies). No.59 (2004.) ,p.55- 65
JaLC DOI	
Abstract	There has been the increase in interest in the body. Having been affected by Cartesian thought, sociology has followed along time tradition in accepting a mind-body dichotomy. This mind-body dualism associates with a Cartesian thinking. This has an influence on the sociological approach to the body. The body has been something of an "absent presence" in sociology. To establish "the sociology of the body", we need to challenge to this dualism inherent in Cartesian thinking and in sociology. In this paper, I am going to show that the absence of the body in sociology is a result of the failure in grasping works of Descartes. Descartes refers to the union of mind and body as the "primitive notion". I shall give attention to this notion in grasping the body. It is the relation between sociology and works of Descartes that should be examined and renewed. I think the union of mind and body as the "primitive notion", is relates to "the basic body". There are some theories which focus on "the basic body". The sociological theory of the body, which could cover "the basic body", is socially and theoretically needed. But, we do not need to take "the basic body", as a fixed and substantial one. If we do so, we would follow in our superiors steps. We shall take "the basic body" as the image. My approach towards the image of "the basic body" will leads to "the sociology of the body". To do so, we must first return toworks of Descartes. And this will also leads to the renewal of the sociological thinking. I shall do this trial from the perspective immanent in sociology.
Notes	論文
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN0006957X-00000059-0055

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

〈原身体〉像へ

——「身体の社会学」への一アプローチ——

Toward the Image of "the Basic Body"

—One Approach to "the Sociology of the Body"—

松　尾　信　明*

Nobuaki Matsuo

There has been the increase in interest in the body. Having been affected by Cartesian thought, sociology has followed a longtime tradition in accepting a mind-body dichotomy. This mind-body dualism associates with a Cartesian thinking. This has an influence on the sociological approach to the body. The body has been something of an "absent presence" in sociology. To establish "the sociology of the body", we need to challenge to this dualism inherent in Cartesian thinking and in sociology.

In this paper, I am going to show that the absence of the body in sociology is a result of the failure in grasping works of Descartes. Descartes refers to the union of mind and body as the "primitive notion". I shall give attention to this notion in grasping the body. It is the relation between sociology and works of Descartes that should be examined and renewed.

I think the union of mind and body as the "primitive notion" is relates to "the basic body". There are some theories which focus on "the basic body". The sociological theory of the body, which could cover "the basic body", is socially and theoretically needed. But, we do not need to take "the basic body" as a fixed and substantial one. If we do so, we would follow in our superiors steps. We shall take "the basic body" as the image. My approach towards the image of "the basic body" will leads to "the sociology of the body". To do so, we must first return to works of Descartes. And this will also leads to the renewal of the sociological thinking. I shall do this trial from the perspective immanent in sociology.

はじめに

身体とは，権力関係や資本，欲望などが直截そこに交錯する場であり，現代社会の多くの問題に，身体が絡んでいる（見田・内田・市野川編，2003）。「身体とはまだほとんど未知の大陸のようなもの」（見田・内田・市野川編，2003: vi）と言えるだろう。社会学において，今日，さまざまな身体に関するアプローチがみられるが，しかし，そこには「不在の身体」が存在している。ターナーは，「身体の社会学が

* 慶應義塾大学大学院社会学研究科博士課程

ないこと」を指摘している (Turner, 1984＝1999: 10)。その原因は，デカルトに由来する，いわゆる「心身問題」を社会学が理論として捉えきれていないこと，そして，精神と身体とを固定化させて捉えてしまっていることにあると考えられる。つまり，社会学における身体の不在とは，社会学がデカルト思想との関係をしっかりと築けていないことに根深く由来すると考えられる。

本稿は，Howson (2004), Shilling (1993) の整理にならい，社会学における身体の不在がデカルト「心身問題」の把捉の仕方に起因すること，そして特に『省察』と「エリザベトへの手紙」にみられる，デカルトの「原初的概念」としての「心身結合」を考察し，捉え直し，現代の社会学理論に接続することを主眼とする。つまり，現在において「身体の社会学」を構想しようとするとき，デカルト「心身問題」と社会学理論との関係を再び築き直すことが，論理必然的な帰結として要請されているということである。

現在の社会学理論において，このような不在の身体へのアプローチとして，生体，「原身体性」，内臓系（自律系），といった概念に着目するものが少数ながらある[1]。これらは，「基層的身体」を探る試みだと位置づけられる。これらを，筆者は〈原身体〉を捉える試みと整理し直すが，しかし，実体的，固定的なものとしては考えない。この点で，「本質主義」とも道を異にする。そうではなく，いわば，像として捉えられるような〈原身体〉，すなわち〈原身体〉像へと向かうアプローチというものを，「身体の社会学」を構想することにおいて決定的に重要なものであると考え，本稿はそれを提出するものである。

筆者のこの試みは，身体というものを軸としたひとつの理論モデルを，社会学の理論更新の一環として，デカルト以来の思考の伝統に位置づけようとするものである。本稿の作業は，身体のみにとどまらず，社会学理論における問題点を内在的に捉え直すための，ひとつの手がかりを提示することにつながるであろう。

1. 社会学とデカルト「心身問題」

Howson (2004) は，社会学における理論展開が，デカルト以来のいわゆる「心身問題」に基づいているということを指摘している。「19 世紀に出現した，他の諸ディシプリンと同様に，社会学の歴史上・概念上の進展は大部分，デカルト（派）の遺産に基づいている。その遺産とは，精神と身体とを存在論的に分離することを主張し，精神に身体を優越する特権を与えるものである」(Howson, 2004: 3)，と述べる。そして，「精神／身体，主体／客体，自己／他者などといった二項対立こそが，人間の身体 (the human body) に対する社会学的なアプローチにとり，とりわけ重要な意味をもつ」(Howson, 2004: 9) とされる。よって，「現代の重要な部分をなす二元論とは，身体が精神にとっての分離した対象となった，歴史的に明確な諸条件から受け継がれた遺産であることを表している」(Howson, 2004: 10)，ということが述べられる。ターナーもまた，「大方の社会学は，基本的にはいまもってデカルト派」であり，「精神—身体の厳密な二分法をそれとなく受け入れている」と述べている (Turner, 1984＝1999: 2)。

こうした点から，「身体の社会学」を今日構想する場合，デカルト「心身問題」が改めて考慮に入れられる必要があるということになる。

2. 社会学における身体の「二重の地位」

Shilling (1993) は，身体が社会学において，二重の地位を占めてきたことを指摘する。「ディシプリンそのものから完全に消失してしまうかわりに，身体は社会学において歴史的に『不在の存在』('absent

presence') であるなにものかであったのである」(Shilling, 1993: 19) とされ，そして，「身体とはよって，社会学において不在でもあり，存在してもいるものなのである」(Shilling, 1993: 23)，と Shilling は書く。なお，ターナー (1984＝1999) は，社会学における身体の「無視」とは，身体が欠落していたというよりも，社会学が身体を覆い隠してきたと捉えた方がより正確だと述べている（Turner, 1984＝1999: 36)。

Shilling (1993) の第 4 章は，'The Socially Constructed Body' である。Shilling は，この本の全体的なテーマとは，上記のように社会学者たちが，伝統的に身体に対し二重のアプローチをとってきていること，そして社会学者たちが，身体が社会的意義をもっていることに対し，明確に焦点を合わせることをしていないこと，をあげている。よって，「社会構築主義者 (Social constructionist)[2] たちの見解は，社会（性）を身体にもちこむことで，こうした傾向に挑んでいる」(Shilling, 1993: 71) と判断される。

しかし，Shilling によれば，「社会構築主義 (social constructionism) にはさまざまな問題点がある」(Shilling, 1993: 72)。それは，「こうした構築主義者たちの見解により，身体に関する社会的意義に関しては広く論じられるものの，身体によって何が意味されるのかに関しては，ほとんど知りえないという傾向があるからだ」(Shilling, 1993: 72) と言われる。そして，「社会学の身体に関する二重のアプローチを，克服するのではなく，別のかたちで再生産してしまいかねないところに，社会構築主義のアプローチのもつ潜在的危険性がある」とされる (Shilling, 1993: 72)。

Shilling は身体への社会構築主義的なアプローチのひとつとして，フーコーの理論を取り上げている。Shilling は，「[フーコーは] たとえば，規律システムやセクシュアリティに深く関わる。しかし，彼の議論のなかで，身体は分析の実在する物質的な対象としてはなくなる傾向がある」(Shilling, 1993: 80) とし，このことが明示されているひとつの例として，フーコーの精神／身体の関係にたいする見解をあげている。つまり，フーコーの「心身問題」に対するスタンスが，不在の身体に関し，問題とされているのである[3]。

3. デカルト「心身問題」

以上みてきたことから判断されるのは，現在，社会学において，身体に関するさまざまな理論的アプローチが存在しているが，しかし，そこには身体の存在／不在があり，いわば不在の身体，覆い隠された身体，語られていない身体が存在するということである。そしてこうした事態が生起していることのいわば淵源として，デカルトに由来するとされる，いわゆる「心身問題」を振り返る必要がある，ということである。

デカルトは，いわゆる「心身問題」の祖として知られる。この「心身問題」が，哲学上の問題として浮上したのは，デカルト哲学によってである（Shaffer, 1968＝1971，野田，1998 など)。デカルトは，精神＝魂と，物質＝物体＝身体とを，2 つの異なる実体として区別した。デカルトにおいて，精神にはいかなる物質性もなく，物質からは一切の精神的なものが排除される（谷川，1995: 98)。しかし，デカルトは精神と身体の分離だけでなく，精神と身体の結合についてもまた，同時に論じたのである。

たしかに，デカルトの議論には「混乱」がみられる。谷川 (2002) は，デカルトは心身結合をそれ自身からしか理解されえない「原初的概念」として捉え，さらに生活の次元に属するものとして捉えられることに気づいていたが，しかし残されたデカルト哲学は，心身の実在的区別に重点をおく二元論として，あらゆる方向に展開されてしまったのであると整理する（谷川，2002: 157)。このように後年捉えられ

ることになる原因は，たしかに，デカルトの精神と身体をめぐる議論の「混乱」に帰せられるものである。

3-1. 『省察』

デカルトの著作中，精神と身体の結合／分離ということが明確に描かれているものとして，『省察』があげられる。省察開始にあたり，デカルトは言う。「精神が身体から実在的に区別されることが証明される。にもかかわらず，精神は身体と密接に結ばれており，それといわば一体をなしていることが示される」(Descartes, 1641＝1978: 237 上)，と。『省察』において，精神と身体の結合に関する記述は，次のように語られる。「精神と身体との合成体としての私」(Descartes, 1641＝1978: 300 下)，「精神と身体との合成体としての人間」(Descartes, 1641＝1978: 305 下)，と[4]。

しかし，同時に，精神と身体の分離に関しても述べられる。その記述とは，以下である。「(……) 精神と身体との間には，身体はその本性上つねに可分的であり，精神のほうは，これに反して，まったく不可分であるという点で，大きな差異が存することである」(Descartes, 1641＝1978: 303 下)[5]。

このように，『省察』においては，精神と身体の結合／分離について，語られている。

3-2. エリザベトへの手紙

『省察』後に書かれた，1643 年 5 月 21 日付の，エリザベトへの手紙。このなかでデカルトは，人間のなかには，ある種の「原初的概念」(notion primitive) が宿っており，それがもととなり雛形となり，他のすべての認識が形づくられることについて述べる。「精神と身体とを合わせたものについては，われわれは合一の概念しかもちません。この概念に，精神が身体を動かし，身体が精神に作用する力の概念が依存しています」(デカルト＝エリザベト，2001: 19)。1643 年 6 月 28 日付の，エリザベトへの手紙においては「観念あるいは原初的概念」が 3 種類であることが語られる。その概念とは，「精神の概念，身体の概念，および精神と身体との合一の概念」(デカルト＝エリザベト，2001: 28) である。そして，「精神と身体との合一を理解するようになるのは，生と日常の交わりだけを用い，省察したり想像力をはたらかせるものを研究したりすることをさし控えることにおいてです」(デカルト＝エリザベト，2001: 29)，と述べられる。

このように，精神と身体との合一とは，ただ日常の生活，日頃のひととの交わりを通じて，しかも思索や想像力を必要とする事物の勉強をさしひかえることによって，初めて理解できるようになるものなのである。心身の結合は，「哲学的思索によることなく」「思索をさしひかえることによって」経験されるのであり，デカルトによれば，精神と身体の実体から理論的に分析・総合されることはありえない。それは「原初的概念」なのであり，「それ自身によってのみ，理解されうる」ものなのである（谷川，1995: 158)。心身の結合とは，もともと「人間の保存」，さらに端的に言えば人間そのものにほかならないものであり，人間である私たちにとっては結局それを生きるしかないものである（谷川，1995: 159)。こうした心身結合とは，「自然」に従うものであり，こうして示された人間の「自然」は，「精神のみに属する」第一の自然とも，「物質のみにかかわる」第二の自然とも異なる，いわば第三の自然であると言える（谷川，1995: 160)。

このように，デカルトが『省察』で描くのは，理論的理性だけでは捉えることのできない心身の結合を，現に経験し生きていかざるをえないということなのである（谷川，1995: 161)。

3-3. 二元性論 (dualicisme)

以上にみられる，デカルトの議論を，坂井 (1980→1996) は「二元性論」(dualicisme) として捉える，

という観点を提出する。それは，こういうものである。心身の実体的結合から出発し，したがってその真只中において精神と身体との明晰かつ判明な観念を形成することによって心身の実在的区別を論証すること，これがデカルトの『省察』の主題であると理解することである。

坂井は，「デカルトの体系，彼の理論的な立場とは，じつに心身の実在的区別とその実体的結合の同時的存立を許容するものであること，否，むしろ心身の実体的結合なしにはデカルトの体系そのものが成立しえない」（坂井，1980→1996: 81），と言う。坂井の論とは，「デカルトの体系は同時に心身の実在的区別とその実体的結合とを存立せしめる相補的な『二元性論』(dualicisme)」（坂井，1980→1996: 84）であるとして捉えることである。デカルトの体系はたんなる「二元論」(dualisme) ではない。それは「物心分離的な局面とともに心身結合的な局面をも併有する」（坂井，1980→1996: 88，傍点原文）「二元性論」(dualicisme) にほかならない，とされるのである。

4. 基層的身体

デカルトが言ったのは，生活次元において，「理論的理性だけでは捉えることのできない心身の結合を，現に経験し生きていかざるをえない」ということであった。そして筆者は先に，現代の社会学理論における身体へのアプローチでは，不在の身体が現出してしまうということをみた。

それでは，現在の社会学理論において，このような身体，すなわち不在の身体，覆い隠された身体，語られていない身体をとらえるアプローチとして，どのようなものがあるのだろうか。これらは端的に，「基層的身体」を探る試みであると考えられる。

西原 (1996) は，主観性／主体性をめぐる問題圏に関する，第二次世界大戦後の日本における哲学思想と社会学理論との関係を探り，今日の社会学の理論的課題をあぶり出している。西原があげる「知の地殻変動」の例に共通にみられる特徴として，「主観性ないし主体性を素朴に議論の前提とするデカルト的な『主客図式』，つまり西洋近代の『主客二元論』への批判的視座」（西原，1996: 7）があったことを指摘する。しかし，この「主客二元論」への問いは，必ずしも社会学理論の主題の一角を形成しえなかったことも指摘する（西原，1996: 7）。

今日の身体に関する理論における「身体の不在」（「主客二元論」をその淵源とする）を乗り越え，デカルトの議論を踏まえた「原初的概念」として捉えられる心身の結合，そうしたものをも射程に含める議論・理論として，少数ながら以下のものがあげられるだろう。

4-1. 生体

廣松 (1986→1997) は，「共同主観性」の成立機序を発生論的に論じる。彼は，発生論的に「原基的・原初的な局面」（廣松，1986→1997: 487）を考究しようとしているように思われる。彼は言う，「生体は振動系であること，この事実に留目することが戦略的一要件をなす。振動系とはいっても，それは，単純な力学的振動装置ではなく，多種多様な物理的・化学的振動機構に支えられ，多種多様な振動の重合系である」（廣松，1986→1997: 479）と。そして，「生体が振動系であり，振動的伝達体-振動的反応体であるという事実」（廣松，1986→1997: 481）が銘記される[(6)]。

西原 (1998) は廣松を受けた形で，議論を展開する。それは，「間生体性」とされるものである。言語をもった人間以前の，1 個のヒトは，まだ主体とはいえない。また，相互コミュニケーションの基盤となるのも，この生身のヒトである。それゆえ，その相互行為の基底は単なる主体間の関係ではなく，「あえて言えば，生体間の関係である。だからそれを『間生体性』(inter-living-body) の関係と呼んでおこう」

(西原, 1998: 84) として,「発生論的な, より基底的な事態において, 少なくともわれわれは徹頭徹尾, 間生体的=間主体的であること, このことは近代性のまどろみにおいて忘却されてきた」(西原, 1998: 87) ことを指摘する。

西原 (2003) は,「間生体性」の概念を展開させる。身体を, 従来捉えられていたものよりも, より基層的に捉えること。そしてそのことが, われわれヒトが身体をベースとした相互行為を行うことによって成立している社会を, より基底的に捉えることにつながること。そうした, 複眼的な思考を展開するのである。西原は「間主観性」,「間身体性」に着目し, しかし, それよりもより「基層的身体」,「生体」の領域を理論的に考究しようとする。「間生体性」とは, 間身体性よりも, より生物学的な領域なのであるとされている。「『間生体的』という表現は,『間身体的』よりも基層の事態を指す語として用いている」のであるが, しかし,「その境界は流動的である」(西原, 2003: 293) とされる。間生体的諸力としては,「リズム・共振, エロス・共感, 身体的暴力」(西原, 2003: 49), などといったものがある。そして, いかにして相互行為が可能になるのかという点,「それが間生体的な相互行為から言語的な相互行為にいたるいわゆる行動発達論的な道筋」により示される (西原, 2003: 274), とされる。以上が,「生体」(「間生体性」) に関する議論である。

4-2. 原身体性

90 年代を代表する身体論として, 大澤 (1990, 1992) があげられるが, 大澤は「原身体性」という概念を提出する。「原身体性」とは何か。大澤 (1990) によればそれは,「物質の全体と自身とを完全に同化」させてしまうような,「自然性の領域と合致している身体の様態」を指す (大澤, 1990: 17)。このような身体の境位は,「内在性の極点」にあり (大澤, 1990: 18), 外的に対峙すべき一切の対象をもたず, あらゆる知覚・感覚器官を未活性状態においた「全一的・前差異的な世界」なのであり,「身体がその活動を開始させるのに先立って置かれているような次元」のことを言うのであるとされる (大澤, 1990: 18)。「原身体性」とはこのような, 主客未分の状態のうちにあるのだと言える。

大澤 (1992) は,〈原身体性 (原身体的平面)〉とは,「内在的な自然性の世界と完全に合致している身体の存在の様式」を指すのであると言う (大澤, 1992: 30)。それは,「身体の癒合作用の極限に見出される身体の位相」であり, そのような状相は,「すべての知覚・運動器官が未活性にあるような場合にのみ, 得ることができる」(大澤, 1992: 34) とされる。そして,〈原身体性〉は,「その社会生活が始源として想定する場所」なのであるとされている (大澤, 1992: 34)。そして, 以下のような重要な指摘を行う。

> 〈原身体性〉の境位がすでに, 身体間の差異性 (他者性) を, 潜在化させて保持していた。〈原身体性〉は, 他者性を内具させた胚珠のようなものであり, その端的な単一性のうちに異和性への参照を含有させているのであった (……)。しかし, それは潜在的である (……) (大澤, 1992: 35)。

このように,「原身体性」について定義する大澤は,「原身体性 (原身体的平面)」とは,「生成の諸作用がその上で展開される地平のようなものと考えて良い」(大澤, 1992: 314) と言うのである。

大澤 (2004) は, 村上 (2002a, 2002b) における「森」の機能を参照している。村上 (2002a, 2002b) においては作品中, 身体の代謝, そして内臓系に関する記述が頻出していた。主人公カフカの父は, 内臓をモチーフとした芸術作品を作り, 作品中では,「迷宮」=腸であることも語られていた (村上, 2002b:

219)。大澤は，このような不透明な森が，他者としての他者，つまり，「僕」の把握が決して及ばない他者の隠喩であることは，間違いないと言う（大澤，2004: 182)。そして，この森の不透明性は，小説の中で，何度も「迷宮」や「迷路」に喩えられていた。ところが他方，小説中で，もともと人間のはらわた，腸が，「迷路」のメタファーだったとする説が紹介される。だとするならば，「森の他者性・外在性こそが，人間にとって，最も私的・内的だということになるのではあるまいか」(大澤，2004: 182)，と語られる。ここまでみてくると，大澤が展開した「内在性の極点」としての「原身体性」のいわばさらなる展開として，内臓系（自律系）が位置づけられることになると考えられるだろう。

4-3. 内臓系（自律系）

湯浅 (1996) は，体性系と自律系に着目し，身体論の整理を行う。この，体性系，自律系とは，解剖学の術語である。それぞれ，体壁系（＝動物性器官，organon)，内臓系（＝植物性器官，splanchnon）とも呼ばれる。西洋の哲学者たちが身体について考える場合は，体壁系（体性系）に注目するだけで内臓系（自律系）は概して無視している。ベルグソンもメルロ＝ポンティもこの点は共通しているが，デカルトだけは例外であると，湯浅は整理する（湯浅，1996: 61-62)。体壁系（体性系）は，その感覚機能と運動機能を仲介する神経系の中枢部，脳髄によって代表される。内臓系（自律系）は，その吸収機能と排泄機能を仲介する循環系の中心部，心臓により代表される（三木，1992a: 146)。心情と精神は，この心臓と脳に由来したもので，それぞれ人体を二分する“植物的ないとなみ”と“動物的ないとなみ”を象徴する（三木，1997: 38)。デカルトが『省察』において言及しているのはまさに，内臓系（自律系）であった（Descartes, 1641＝1978: 302 上―下)[7]。

5. 〈原身体〉像へ

以上，デカルトからはじまり，生体，「原身体性」，内臓系（自律系)，とみてきた。これらは，現代の社会学理論における身体へのアプローチでは，不在の身体，覆い隠された身体，語られない身体，すなわち，「基層的身体」に相当するものであると意味づけられよう。これら「基層的身体」を，〈原身体〉とまとめることにしよう。大澤には，表記の一貫性がほとんどみられないため，〈原身体〉と表記することにする。そして西原は，自身，「間生体的諸力」という術語が，そう適切ではないということを書いており（西原，2003: 308）これも，〈原身体〉と表記することにする。筆者がここまで議論を整理してきたのは，デカルト「心身問題」を解きほぐすことにより，不在とされてしまいがちであるこうした〈原身体〉へのアプローチを明確化しようとするためであった。

しかしながら，この〈原身体〉を，実体的なもの，固定的なものとして考えてはならない。廣松 (1977→1996) は，「心身問題」[8] のアポリアを解消する作業へと通ずるのは，身心関係というかたちでの「物象化」が，何をどこでどう見誤るところから生ずるのか，それを「日常的意識（とりわけ，いわゆる意志行為としての実践）の具体的分析に即して解明する作業」，このことであると説く（廣松，1977→1996: 283-284，傍点引用者)。そして，市川 (1975→1992) は，「精神」と「身体」とは，「人間的現実の具体的な活動のある局面」を抽象し，固定化することによって与えられた名前であり，このような具体的現実を指し示すことばとして，「より適切なのは，日本語の『身（み)』ということばであろう」，と指摘している（市川，1975→1992: 196，傍点引用者)。

精神と身体の関係を，物象化しないこと。抽象化，固定化しないこと。日常，具体的活動の局面においてとらえること。作田 (1993→2001) は，生命を研究する方途を，次のように書いている，「フィルム

の1こま1こまはリアリティの固定された断面にしかすぎないけれども，これらを映写機で回転させれば，リアリティに近い像が浮かび上がってくるだろう」(作田，1993→2001: 35) と。ここで言われている固定化しないあり様すなわち，「像」というあり様をヒントとし，いわば，像として捉えられるような〈原身体〉，すなわち，〈原身体〉像へと向かう試みというものが，考究されねばならないのであろう。

デカルトは，心身結合を，精神にも身体にも還元できない，第三の「原初的概念」とした。それは，「私のもの」としての私の身体の経験が，デカルトによっては精神との実在的混合として説明されただけでなく，精神と身体のいずれからも，その両方からも把握できない，「それ自身からしか理解されえない」，「原初的概念」として捉えられていたのであった。そして，それはさらに，「生活の次元」に属するものとして捉えられていたのであった（谷川，1995: 167)。そうであれば，精神と身体の関係を物象化，抽象化，固定化しない，像としてとらえられるような〈原身体〉，すなわち〈原身体〉像とは，デカルト言う「原初的概念」としての心身結合に相当しうる概念なのであると定立できるであろう。

よって，社会学における不在の身体をたどる試み，すなわち〈原身体〉像へと向かう試みは，イコール「本質主義」(中河・北澤・土井編 (2001)，上野編 (2001) など）となることを意味しない。筆者の提起するこの試みは，デカルトを踏まえた，身体の始源（アルケー）を問う試みなのである。これは，「構築主義」でもなく，「本質主義」でもない，身体へのアプローチを意味する。これは，身体の基層を問う作業であり，「単なる無根拠からの出発の路線とは水準を異にする」(西原，1996: 12，傍点原文）ものである。たしかに，身体とは「社会的構成概念にほかならない」(Turner, 1984＝1999: 5) のではあるが，しかし，同時に「身体は，社会的に構成されたものでありながら，自然環境でもある」(Turner, 1984＝1999: 7-8) のである。そのような意味において，まさに坂井 (1980→1996) の言う「二元性論」(dualicisme) 的に，社会学における不在の身体，覆い隠された身体，語られていない身体を捉える〈原身体〉像へのアプローチというものを，筆者は提出しようと考えるのである。

社会学における身体論の問題点を剔抉することが，ひとつ身体を論ずるという射程にとどまるだけではなく，より大きくは，社会学におけるデカルト「心身問題」の捉え直しにつながること。そして，不在の身体とは，デカルトが論じたような「原初的概念」，すなわち「生と日常の交わり」において経験される，精神と身体との結合にそのヒントがあると考えられること。このように，社会学における身体論の問題圏の始源，すなわちデカルトの理論を問うことが，身体の始源を問うこと，さらには社会学的思考の始源を問うことと重なること。筆者の提示する，〈原身体〉像へのアプローチとは，こうした，幾重もの意味での始源を問う試みが交錯するものなのである。それは，あえて言えば，社会学理論が（改めて）デカルトへと還ることなのである[9]。

6. おわりに

本稿では，社会学における身体の把握，すなわち「身体の社会学」において，デカルト「心身問題」を捉え直すことが決定的に重要であることを見出し，デカルトの言う「原初的概念」としての心身結合に相当すると思われる現代の少数の理論をみた。次稿では，具体的にフーコーの著作（とくに，加藤 (2001) が「〈身体の社会的構築〉にかなう代表的な作品」(加藤，2001: 169) とする『監獄の誕生—監視と処罰』，『性の歴史 I』）に立ち入り，筆者が今回提示した〈原身体〉像へのアプローチと，フーコーのアプローチとの関係を，Shilling も参照しつつ，具体的に論じたいと考えている。フーコーが分析の対象として導入した身体とは，「望ましい身体」すなわち，「権力の操作をたやすく受け入れ，しかも精神

と不可分の身体」(内田 2003: 290, 傍点引用者) なのであった。

フーコーは，自身の試みが「始源を問わない探究」であることを表明し，それが〈考古学〉なのであるとしている (Foucault, 1969＝1981: 194-202)。現在の社会学理論において，西原 (2003) は，直接，言表や言説分析のみを射程に入れているというわけではないものの，特にフーコーにならった権力論をあげ，現在なお支配的である始源を問わない思考，発生を論じない思考に対する強い異和を表明している。現在の批評理論においては，加藤 (2004) が，それではもはや理論的にも，読みの現場性としても立ちいかない事態が生じているとして，フーコーの始源を問わない思考（ここではテクスト論）を批判する。筆者の立論もまた，始源を問わない思考に対位するものとなるだろう。

〈原身体〉像へのアプローチは，社会学理論内在的にデカルトに還り，そして，「生と日常の交わり」から考究されるものである。それは，大きな構えで言うなら，「近代的知」としての社会学の枠外に置かれたもの，そうしたものを，（あえて）社会学内在的な視線から探究する試みでもあるのである。

注

(1) 生体に関しては廣松 (1986→1997)，西原 (1998, 2003) が論じている。「原身体性」に関しては，大澤 (1990, 1992) が論じている。内臓系（自律系）に関しては，湯浅 (1996)，三木 (1992a, 1997) が論じている。

(2) 中河 (2001)，上野編 (2001) を踏まえた上で，本稿では "social constructionism" に対し，「社会構築主義」という訳語をあてることにする。

(3) 「ひとたび，身体が近代規律システムに包含されてしまえば，言説的な (discursive) 権力の位置を引き継ぐのは精神である。結果的に，身体は，精神に集中する諸言説によりコントロールされる，ひとつの不活性なかたまりへと切り詰められてしまいがちである。しかしながら，この精神とは，それ自体肉体から離脱している (disembodied) のだ。われわれは，生きた人間の身体内における精神の位置について，よく分からないのである」(Shilling, 1993: 80)。

(4) さらに，「自然はまた，それら痛み，飢え，渇き等々の感覚によって，私が自分の身体に，水夫が舟に乗っているようなぐあいに，ただ宿っているだけなのではなく，さらに私がこの身体ときわめて密接に結ばれ，いわば混合しており，かくて身体とある一体を成していることをも教えるのである」(Descartes, 1641＝1978: 299) と述べられている。

(5) さらに，「そしておそらくは〔あるいはむしろ，すぐあとで述べるように，まちがいなく〕私は身体をもっており，これが私ときわめて密接に結びついているにしても，しかし私は，一方で，私がただ思惟するものであって延長をもつものでないかぎりにおいて，私自身の明晰で判明な観念をもっているし，他方では，身体がただ延長をもつものであって思惟するものでないかぎりにおいて，身体の判明な観念をもっているのであるから，私が私の身体から実際に分かたれたものであり，身体なしに存在しうることは確かである」(Descartes, 1641＝1978: 296 下) と述べられる。

(6) しかしながら，廣松の生体に関する議論は，筆者には説得性に欠けるように思われるくだりもあった。廣松自身，「ポイントになる一事を一点突破式に強調し，比喩に託して全体的描像の構制をイメージアップしうれば足ることかと念う」(廣松，1986→1997: 479) と書いている。

(7) 内臓系（自律系）に関するものとして，ブルデュー「ハビトゥス」概念も参照のこと。「そして趣味 goûts とはおそらく，何よりもまず嫌悪 dégoûts なのだ。つまり他者の趣味，他人の趣味にたいする，厭わしさや内臓的な耐えがたさの反応（「吐きそうだ」などといった反応）なのである」(Bourdieu, 1979＝1990: 88，傍点原文)。そして，ターナー (1984＝1999) の書物は，胃と消化について述べ，「すべての偏見は内臓にもとづく」という，ニーチェの言葉の引用で始まっている。

(8) 廣松は「心身問題」を，「心―身」関係と表記している。

(9) 1961 年 5 月 3 日，メルロ＝ポンティは自宅で，「机の上に開かれたデカルト全集の一冊の上に伏せるようにして」(鷲田 2003: 314) 死んだ。意識を生み出す第一原理の解明のプロセスに関して，茂木 (2004) は，「私たちは，もう一度，ルネ・デカルトにならなくてはならないのかもしれないのである」(茂木，2004: 234) と語っている。

参考文献

美頭千不美 1998「デカルトと心身問題」,『デカルト読本』法政大学出版局

Bourdieu, Pierre. 1979 *La Distinction: Critique Sociale du Jugement*, Éditions de Minuit, Paris.（石井洋二郎訳 1990『ディスタンクシオン［社会的判断力批判］I』藤原書店）

——— 1979 *La Distinction: Critique Sociale du Jugement*, Éditions de Minuit., Paris.（石井洋二郎訳 1990『ディスタンクシオン［社会的判断力批判］II』藤原書店）

デカルト研究会編 1996『現代デカルト論集 III 日本編』勁草書房

Descartes, René. 1641 *Meditationes de prima philosophia*.（井上庄七・森 啓訳 1978『省察』,『世界の名著 27 デカルト』中央公論社）

デカルト 2001「書簡集」, 三輪・本多・花田・竹田訳『増補版 デカルト著作集 3』白水社

デカルト＝エリザベト 2001 山田弘明訳『デカルト＝エリザベト往復書簡』講談社

Foucault, Michel. 1969. *L'Archéologie du savoir*, Éditions Gallimard, Paris.（中村雄二郎訳 1981『知の考古学』河出書房新社）

ミシェルフーコー 1990 清水 徹・豊崎光一訳『作者とは何か』哲学書房

廣松 渉 1977→1996「心身関係の難題と打開の方向」,『廣松渉著作集 第 4 巻』岩波書店

——— 1986→1997「共同主観性の現象学」,『廣松渉著作集 第 6 巻』岩波書店

Howson, Alexandra. 2004. *The Body in Society*, Polity Press, Cambridge.

市川 浩 1975→1992『精神としての身体』講談社

市野川容孝 2000『身体／生命』岩波書店

井上 俊ほか編 1996『岩波講座 現代社会学 第 4 巻 身体と間身体の社会学』岩波書店

菅野 仁 2003『ジンメル・つながりの哲学』日本放送出版協会

加藤典洋 2004『テクストから遠く離れて』講談社

加藤秀一 2001「構築主義と身体の臨界」,『構築主義とは何か』勁草書房

草柳千早 1999「構築主義論争を読みかえす」,『文化と社会 創刊号』マルジュ社

真木悠介 1993『自我の起原』岩波書店

Merleau-Ponty, Maurice. 1942 *La Structure du Comportement*, Press Universita 1 res de France, Paris.（滝浦静雄・木田 元訳, 1964,『行動の構造』みすず書房）

三木成夫 1989『生命形態の自然誌 第一巻 解剖学論集』うぶすな書院

——— 1992a『海・呼吸・古代形象』うぶすな書院

——— 1992b『生命形態学序説』うぶすな書院

——— 1997『ヒトのからだ』うぶすな書院

見田・内田・市野川編 2003『ライブラリ相関社会科学 8〈身体〉は何を語るのか—20 世紀を考える (II)』新世社

茂木健一郎 2004『脳内現象〈私〉はいかに創られるか』日本放送出版協会

村上春樹 2002a『海辺のカフカ（上）』新潮社

——— 2002b『海辺のカフカ（下）』新潮社

中河伸俊 2001「Is Constructionism Here to Stay?」,『社会構築主義のスペクトラム——パースペクティブの現在と可能性——』ナカニシヤ出版

中河伸俊・北澤 毅・土井隆義編 2001『社会構築主義のスペクトラム——パースペクティブの現在と可能性——』ナカニシヤ出版

西原和久 1996「戦後思想と社会学理論——現象学的視座からみた〈主観性〉をめぐる問い——」,『社会学評論』Vol. 47, No. 1

——— 1998『意味の社会学——現象学的社会学の冒険』弘文堂

——— 2003『自己と社会 現象学の社会理論と〈発生社会学〉』新泉社

野田又夫監修, 湯川佳一郎／小林道夫編 1998『デカルト読本』法政大学出版局

大澤真幸 1990『身体の比較社会学 I』勁草書房

——— 1992『身体の比較社会学 II』勁草書房

——— 2004「世界を見る眼 村上春樹の『アフターダーク』を読む」,『群像 10 月号 特集 新しい「村上春樹」』講談社

坂井昭宏 1980→1996「デカルトの二元論——心身分離と心身結合の同時的存立について」,『現代デカルト論集 III 日本篇』勁草書房
作田啓一 1993→2001『生成の社会学をめざして』有斐閣
Shaffer, Jerome A. 1968 *Philosophy of Mind*, Prentice-Hall, New Jersey.（清水義夫訳 1971『こころの哲学』培風館）
Shilling, Chris. 1993 *The Body and Social Theory*, Sage.
霜野壽亮 2004「相互理解についての一考察」『法学研究』第 77 巻第 1 号
副島隆彦 1998『完結・英文法の謎を解く』筑摩書房
谷川多佳子 1995『デカルト研究——理性の境界と周縁——』岩波書店
——— 2002『デカルト「方法序説」を読む』岩波書店
Turner, Bryan S. 1984 *The Body and Society: Explorations in Social Theory*, Basil Blackwell.（小泉・藤田・泉田・小口訳 1999『身体と文化—身体社会学試論』文化書房博文社）
湯浅泰雄 1996「身体と間身体関係」,『岩波講座　現代社会学　第 4 巻　身体と間身体の社会学』岩波書店
内田隆三 2003「『従順な身体』について——フーコー，人間への問いと近代性 (2)」,『ライブラリ相関社会科学 8〈身体〉は何を語るのか—20 世紀を考える (II)』新世社
上野千鶴子編 2001『構築主義とは何か』勁草書房
鷲田清一 2003『メルロ＝ポンティ　可逆性』講談社
吉本隆明 1989→2003『ハイ・イメージ論 I』筑摩書房